

生ける神に仕えるダニエル（7）

2009. 3. 10（火）

ベック兄メッセージ（メモ）

引用聖句

ダニエル書 9章23節

「あなたが願いの祈りを始めたとき、一つのみことばが述べられたので、私はそれを伝えに来た。あなたは、神に愛されている人だからだ。そのみことばを聞き分け、幻を悟れ。」

ダニエル書 10章11節

それから彼は私に言った。「神に愛されている人ダニエルよ。私が今から語ることばをよくわきまえよ。そこに立ち上がれ。私は今、あなたに遣わされたのだ。」彼が、このことばを私に語ったとき、私は震えながら立ち上がった。

ダニエル書 10章19節

言った。「神に愛されている人よ。恐れるな。安心せよ。強くあれ。強くあれ。」彼が私にこう言ったとき、私は奮い立って言った。「わが主よ。お話してください。あなたは私を力づけてくださいましたから。」

今日は、「主とともに働く大切さ」について、ダニエル書から学んでみたいと思います。今読んだ箇所は、本当に驚くべき内容が語られています。「あなたは、神に愛されている人だからだ」、「神に愛されている人ダニエルよ」、「神に愛されている人よ」と三回も書かれています。

これはもちろん人間の言葉ではなくて、主ご自身の御口から出た比類ない恵みのことばです。主はもちろん嘘を知らないお方ですから、小さなことをいかにも大きいものであるかのように、誇張して話すことをなさいません。主が語られるならば、真実をもって、ご自分のみこころにあることをそのままお語りになります。

主はダニエルに、「わが愛する人よ」と御声をおかけになりましたが、そうお語りになるには何か理由があるはずです。「主」、全知全能なる主がそう言われるには、その背後に何か理由があります。「わたしはあなたを愛している」。これはすべてを知り給う主の、ダニエルに対するご判断です。もし、私たちにも同じことばをかけていただけるならば、どんなに幸いなことでしょう。ダニエルは、「主に愛された」のです。

聖書を読むと、私たちも、今日集まったひとりひとりも、主に愛されている者であるこ

とが分かります。私たちには理解できないでしょう。けれども、本当にそうなのです。

ヨハネの福音書 3章16節

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。

「世を」とは、人間ひとりひとりを、ということです。

ローマ人への手紙 5章8節

しかし私たちがまだ罪人であったとき、キリストが私たちのために死んでくださったことにより、神は私たちに対するご自身の愛を明らかにしておられます。

ヨハネの手紙・第一 4章9節、10節

神はそのひとり子を世に遣わし、その方によって私たちに、いのちを得させてくださいました。ここに、神の愛が私たちに示されたのです。私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、なだめの供え物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです。

主は、汚れたどうしようもないわがままな人間を愛し、この世さえ愛していただくことを思うと、主の愛を感じて、賛美、また感謝が湧き上がってくるでしょう。

全宇宙をお造りになり、限りない栄光のうちに住んでおられるイエス様が、その御位を捨てて、罪を犯し、汚れ、主に逆らう人々を救うために人間の形をとり、地上に来られたということは、人間の頭では理解できません。けれどそれは、「主の愛そのもの」なのです。主の愛は、「永遠なる愛」です。その愛はいつ始まったかと言いますと、人間がまだ創造されていなかった時からなのです。

しかし、主はダニエルに向かってなぜ、「大いに愛されている人ダニエルよ」と言われたのでしょうか。ダニエルは、主とともに働く者、とりわけ祈りにおいて主とともに働く者であったので、主に「大いに愛されている人」と呼ばれたのです。ダニエルは、特別に選ばれたイスラエルの民に属する者であっただけではありません。彼は、「自分のために生きたくはない。主に用いていただきたい」と思ったので、祈りの人となったのです。そしてダニエルの祈りは、「天にまで届いた祈り」でした。

天にまで届く祈りとは、いったいどういうものなのでしょうか。二つのことが言えます。第一番目。聖書に基づいた祈りです。

第二番目。生活のうちに生きた証しを持つ人の祈りです。

*第一番目。聖書に基づいた祈り

ダニエル書9章2節を見ると、次のように書かれています。

ダニエル書 9章2節

すなわち、その治世の第一年に、私、ダニエルは、預言者エレミヤにあった主のことばによって、エルサレムの荒廃が終わるまでの年数が七十年であることを、文書によって悟った。

とあります。このことから、ダニエルは聖書を読んでいたことが分かります。主のみことばは、ダニエルの心の第一の場所を占めていました。ダニエルは自分の考えを交えず、祈りながら主のみことばを読みました。つまり、「主よ。語ってください。しもべは聞いております」と。ダニエルの一貫した態度とは、そのようなものでした。

もちろんダニエルは、ただ聖書の知識を蓄えるだけではなく、聖書のみことばを正確に知り、それを行なおうとしてみことばを熱心に学びました。もちろんいくら聖書を読んでも、勉強しても、それだけでは十分ではありません。一方通行です。人間は答えなくはいけません。祈らなくてはいけないのです。ですから、「聖書と祈り」、「祈りと聖書」が、一体とならなければなりません。

ダニエルは、みことばを読んだだけではなく、彼は主とともに働く者となり、祈りの人になりました。そして、ダニエルが祈った時、その祈りは天にまで届きました。それは、ダニエルが主のみこころを、よくわきまえて知っていたからです。もし、ダニエルが主のみこころを知っていなかったなら、どんなに熱心に祈っても何も起こらなかったでしょう。「みことばがそのように語っているから、また、あなたは約束を守るお方ですから、期待を持って待ちます」。ダニエルの態度とはそのようなものでした。

ダニエルは、当時の時代における主のご目的を知っていたばかりではなく、主はこのご目的を一つの狂いもなく成就されるお方であることを確信しました。これこそ、ダニエルの祈りが天を動かした理由でした。

パウロは、エペソ書の終わりに大切なことばを書いたのです。ここに三回も、「すべて」ということばが出てきます。

エペソ人への手紙 6章18節

すべての祈りと願いを用いて、どんなときにも御霊によって祈りなさい。そのためには絶えず目をさまして、すべての聖徒のために、忍耐の限りを尽くし、また祈りなさい。

と書いてあります。「絶えず祈り、どんなときにも御霊によって祈り、すべての聖徒のために祈りなさい」とは、提案されているのではなく、命令されているものです。私たちはこの標準から何と遠く離れているのではないのでしょうか。

ダニエルは主のみこころを知るとともに、今自分が置かれている周囲の状態をもよく知

っていたのです。ダニエルは、主の敵バビロンという外国に、捕らわれの身となっていました。バビロンという国で主の民イスラエルが捕らわれているということは、主の最善のみこころではないと確信していました。イスラエルの民の中には、バビロンに捕らわれて、「今は仕方がない。ここで出来るだけ良い暮らしをしよう。妥協しても仕方がない」と思う者もたくさんいたでしょう。しかしダニエルは違いました。彼は、バビロンに捕らわれていたにもかかわらず、あらゆる周りの環境に打ち勝ち、天に属する民である誇りと確信を失わないで、何とかしてイスラエルの民の霊的な状態を回復させ、エルサレムへ導き戻そうと主に祈り求めたのです。

聖書を読むと、ダニエルは毎日三度窓を開け放し、エルサレムを望み見て祈りをささげたとあります。「エルサレム」は、聖書ではいつも主のからだなる教会を象徴するものです。

私たちは、主のご目的をよく知る時にのみ、周りの状態もよくわきまえ知ることができるものです。私たちは自分の状態をよく知っているでしょうか。私たちの群れは、エペソ書に書いてあるような素晴らしい教会でしょうか。教会とはどういうものかと知ろうと思えば、必ずエペソ書を読まなければならないのではないのでしょうか。刑務所の中で書かれた手紙です。エペソ書の中では次のように書かれています。

エペソ人への手紙 1章22節、23節

また、神は、いっさいのものをキリストの足の下に従わせ、いっさいのものの上に立つかしらであるキリストを、教会にお与えになりました。教会はキリストのからだであり、いっさいのものをいっさいのものによって満たす方の満ちておられるところです。

このからだなる教会はかしらなるイエス様にとっていかに大切であるのか、私たちにはちょっと考えられませんし、想像することもできません。

エペソ人への手紙 2章21節、22節

この方にあつて、組み合わされた建物の全体が成長し、主にある聖なる宮となるのであり、このキリストにあつて、あなたがたもともに建てられ、御霊によって神の御住まいとなるのです。

教会とは一つの人間によって構成された宗教団体や一つの組織ではなく、神の御住まいであると記されています。

エペソ人への手紙 3章9節から11節

また、万物を創造された神の中に世々隠されていた奥義を実行に移す務めが何であるかを明らかにするためにほかなりません。これは、今、天にある支配と権威とに対して、教会を通して、神の豊かな知恵が示されるためであつて、私たちの主キリスト・イエスにおいて実現された神の永遠のご計画に沿ったことです。

とあります。

エペソ人への手紙 3章20節、21節

どうか、私たちのうちに働く力によって、私たちの願うところ、思うところのすべてを越えて豊かに施すことのできる方に、教会により、またキリスト・イエスにより、栄光が、世々にわたって、とこしえまでありますように。アーメン。

エペソ人への手紙 4章12節、13節

それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。

エペソ人への手紙 5章27節

ご自身で、しみや、しわや、そのようなものの何一つない、聖く傷のないものとなった栄光の教会を、ご自分の前に立たせるためです。

エペソ人への手紙 5章30節

私たちはキリストのからだの部分だからです。

とあります。私たちは、まだまだ主のみこころから程遠いところにいます。ある兄弟姉妹は、来なくなりました。また霊的に落ち、つぶされて立ち上がれなくなっています。このような時、ダニエルのように霊の燃え上がりを待ち望み、リバイバルのために、主のみこころを動かす祈りの勇者はどこにいらっしゃるのでしょうか。私たちは一つになって、このために祈りたいものです。

天に届く祈りをする前に、

- ・まず、私たちが、今の時代における私たちに対しての主のみこころが何であるかを知る必要があります。それには、周囲の状況や状態をも知る必要があります。
- ・更にもう一つ、私たちが悩み、苦しむ目的も知るべきなのです。主は、ご自分の目的を達成なさるために、ありとあらゆる事がらを用いてくださいます。これを深く心に留めておくことが大切です。

ダニエルは、今イスラエルの民がバビロンで苦しんでいる苦しみも、主が用いてエルサレムに連れ戻すために役立たせてくださると信じました。主は、ご自分の目的が何であるか、心の目が開かれるように、ご自分に属する者を試みられます。その試みは、病、死、いろいろな苦しみがあります。これが、私たちにどうしても説明することのできないことがある理由なのではないでしょうか。主は、私たちの理性を高め、どのような事態にも動じない者にするために、あらゆる出来事を用いられます。

主は、全世界に対しどのようなご目的を持って働いておられるか、また、教会や私たち個人の生活に対して何を望んでおられるか、私たちはそれを知っているのでしょうか。

私たちは、次の二つのうちどちらを選び取って、日々の生活をするのでしょうか。

イスラエルの民のように、バビロンの国に捕らわれ、仕方がないとあきらめ、この世を友として妥協し、毎日を過ごすのでしょうか。それとも、ダニエルとその友だちのように、主のご目的は必ず成ると信じ、主のみこころにかなった聖い歩みをしているのでしょうか。ダニエルとその友だちは、自らを主にささげることによって、主とともに働く者となったのです。

ダニエルが祈った時、祈りは天に届きました。低い天にいる悪魔にも届きましたが、いと高きところにおられる主なる神にも祈りは達し、ご自身のみこころをダニエルを用いて行なうために、天使が遣わされました。

ダニエル書 10章12節から14節

彼は私に言った。「恐れるな。ダニエル。あなたが心を定めて悟ろうとし、あなたの神の前でへりくだらうと決めたその初めの日から、あなたのことばは聞かれているからだ。私が来たのは、あなたのことばのためだ。ペルシヤの国の君が二十一日間、私に向かって立っていたが、そこに、第一の君のひとり、ミカエルが私を助けに来てくれたので、私は彼をペルシヤの王たちのところに残しておき、終わりの日にあなたの民に起こることを悟らせるために来たのだ。なお、その日についての幻があるのだが。」

とあります。心の目が開かれ、主の永遠のご目的が何であるか、また、私たちは今どのような状態に置かれているか、また私たちに与えられる悩みの目的がいったい何であるかを知るなら、祈りに力が加わります。これらをよく知っている人は、ダニエルと同じように天を揺り動かす祈りをする事ができるはずです。

天にまで届く祈りは、今話しましたように、「みことばに基づいた祈り」です。

*第二番目。生活のうちに、生きた証しを持つ人の祈りでなければならない。

ダニエルの祈りは、聞き届けられました。いったいなぜでしょうか。ダニエルは、そのすべてにおいて主に反するものから全く離れた生活をしていたのです。ダニエルは、自分自身を喜ばせることから離れていたと言えます。もし私たちが、主の目的を求めず、自らの願いだけで祈るなら、祈りは天に届かないでしょう。自らの目的は、本当の祈りを妨げます。ダニエルは、自らを喜ばせようとする何ものも持っていなかったため、主は「愛されている人よ」と、ダニエルに呼びかけることがおできになったのです。

パウロは、ピリピ人への手紙の中で、刑務所から、自由の身となった兄弟姉妹を励ますために、注意するために、次のように書いたのです。

ピリピ人への手紙 2章21節

だれもみな自分自身のことを求めるだけで、キリスト・イエスのことを求めてはいません。

これは、信じる者に対する言葉です。

ピリピ人への手紙 1章21節

私にとっては、生きることはキリスト、死ぬこともまた益です。

自由にされたパウロの告白です。

コロサイ人への手紙 1章10節

また、主になつた歩みをして、あらゆる点で主に喜ばれ、あらゆる善行のうちに実を結び、神を知る知識を増し加えられますように。

このようにパウロは、信じる者のために祈り続け、戦い続けたのです。

ダニエルはこの世の方法から全く離れていたと言えます。異邦の民が願い、目指している「主のみこころに反する目的、方法」には、少しも妥協しませんでした。

こんにちの信じる者はどうでしょうか。多くの信じる者は、この世と同じ生き方をしたいと願っているのではないのでしょうか。ダニエルと友だちは、全く違う態度をとりました。

先ほど読んだ箇所ですがもう一度読みます。ダニエル書3章、ダニエルとその友だちの決心についての箇所です。

ダニエル書 3章16節から18節

シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴはネブカデネザル王に言った。「私たちはこのことについて、あなたにお答えする必要はありません。もし、そうなれば、私たちの仕える神は、火の燃える炉から私たちを救い出すことができます。王よ。神は私たちをあなたの手から救い出します。しかし、もしそうでなくても、王よ、ご承知ください。私たちはあなたの神々に仕えず、あなたが立てた金の像を拝むこともしません。」

「私たちの仕える神」。(信じる神というだけではなく。)

多くの信じる者は、この世にあつて認められ、賞賛されようと努め、上にある朽ちないものを求めようとします。この世の流行を追い、この世と同じ生き方をして、どうして証しができるのでしょうか。

もう一つのダニエルと友だちの特徴は、彼らは人を恐れなかったのです。ダニエルは、当時最も権力を持っていた王をさえ、決して恐れなかったのです。

ダニエル書 1章8節

ダニエルは、王の食べるごちそうや王の飲むぶどう酒で身を汚すまいと心に定め、身を汚さないようにさせてくれ、と宦官の長に願った。

ダニエル書 6章10節、11節

ダニエルは、その文書の署名がされたことを知って自分の家に帰った。——彼の屋上の部屋の窓はエルサレムに向かってあいていた。——彼は、いつものように、日に三度、ひざまずき、彼の神の前に祈り、感謝していた。すると、この者たちは申し合わせてやって来て、ダニエルが神に祈願し、哀願しているのを見た。

ダニエル書 6章16節

そこで、王が命令を出すと、ダニエルは連れ出され、獅子の穴に投げ込まれた。王はダニエルに話しかけて言った。「あなたがいつも仕えている神が、あなたをお救いになるように。」

ダニエル書 6章23節

そこで王は非常に喜び、ダニエルをその穴から出せと命じた。ダニエルは穴から出されたが、彼に何の傷も認められなかった。彼が神に信頼していたからである。

もし、私たちが人を恐れ人にへつらうなら、ダニエルのように力ある祈りは決してできません。ダニエルはこの世のいかなる関係にも心を奪われなかったのです。この世と関係を持たないということは、ダニエルとその友だちにとって決して生やさしいことではなかったのです。ダニエルは獅子の穴に投げ込まれ、友だちは燃える火の炉に投げ込まれたのです。

彼らの前には、その時、二つの道があったでしょう。一つは、世と妥協して居心地の良い生活をする。もう一つは、獅子の穴と火の炉に入ることでした。彼らは主の道を選び取りました。妥協せず、自らを主にささげきって、いのちまでも惜しみませんでした。主は、彼らの祈りを聞き、ご自分の栄光を現わされたのです。

ダニエルは、このように主のみこころに反するものから全く分離していましたが、それとともに、一つの目的に心を定めていたのです。

ダニエル書 10章12節

彼は私に言った。「恐れるな。ダニエル。あなたが心を定めて悟ろうとし、あなたの神の前でへりくだろうと決めたその初めの日から、あなたのことばは聞かれているからだ。私が来たのは、あなたのことばのためだ。」

「心を定め」と書いてありますが、ダニエルの心は、主のご目的に集中されていました。

私たちの心は、イエス様にいいなづけされた清い乙女である吉祥寺の集会のために集中され、祈りにその心が注ぎ出されているのでしょうか。

パウロは、主のみこころを知って、祈りました。よく引用される箇所です。

コリント人への手紙・第二 11章2節

というのも、私は神の熱心をもって、熱心にあなたがたのことを思っているからです。私はあなたがたを、清純な処女として、ひとりの人の花嫁に定め、キリストにささげることにしたからです。

浮き草のように定まらない心ではなく、主のご目的に思いを定めた心を、主は祝福してください。私たち信じる者が、めいめいイエス様をかしらとする生ける神の教会であるという自覚を持って集まり、心を定めて祈るなら、天の窓が開きます。祈りは、豊かに聞き届けられるのです。

その前のコリント第一の手紙9章を見ると、パウロはもう既に救われた、なかなか成長しなかった兄弟姉妹に書いたのです。

コリント人への手紙・第一 9章24節、25節

競技場で走る人たちは、みな走っても、賞を受けるのはただひとりだ、ということを知っているでしょう。ですから、あなたがたも、賞を受けられるように走りなさい。また闘技をする者は、あらゆることについて自制します。彼らは朽ちる冠を受けるためにそうするのですが、私たちは朽ちない冠を受けるためにそうするのです。

ピリピ書の中でも、またパウロは書いたのです。

ピリピ人への手紙 3章14節

キリスト・イエスにおいて上に召してくださる神の栄冠を得るために、目標をみざして一心に走っているのです。

とあります。「神の栄冠を得るために」、救われるために、ではありません。

ヘブル書の著者も、同じ思いをもって書き記したでしょう。

ヘブル人への手紙 12章1節

こういうわけで、このように多くの証人たちが、雲のように私たちを取り巻いているのですから、私たちも、いっさいの重荷とまつわりつく罪とを捨てて、私たちの前に置かれている競走を忍耐をもって走り続けようではありませんか。

ダニエルは大いに用いられました。なぜでしょうか。今話しましたように、

- ・彼は、主のみこころに反するものから全く「分離」されていたからです。
- ・また、彼は一つの目的に「心を定め」たからです。

・もう一つ、彼は「忍耐」を持っていたからです。もう一度、ダニエル書に戻りまして、ダニエル書 10章12節、13節前半

彼は私に言った。「恐れるな。ダニエル。あなたが心を定めて悟ろうとし、あなたの神の前でへりくだろうと決めたその初めの日から、あなたのことばは聞かれている

からだ。私が来たのは、あなたのことばのためだ。ペルシヤの国の君が二十一日間、私に向かって立っていたが、」

とあります。ダニエルは心を込めて、二十一日間、三週間、主の御前に祈り込んだのです。祈り続けたのです。一つの問題のために二十一日間祈るということは、決して簡単なことではないでしょう。私たちの場合はいったいどうでしょうか。このような祈りをささげたことがあるのでしょうか。主の前に、一つの問題を携えてほんのしばらくの間祈り、すぐに立ち上がってしまいます。ですから、何も祈りの答えがありません。

ダニエルは、忍耐深く、一つの目的のために主の御前にとどまり祈り続けました。忍耐深い祈りをもって初めて、ダニエルのように素晴らしい経験をすることができるのです。

アブラハムについて、聖書は記しています。

創世記 18章22節後半

アブラハムはまだ、主の前に立っていた。

結局、祈っただけではなく、祈り続けた、という意味です。

創世記 19章29節

こうして、神が低地の町々を滅ぼされたとき、神はアブラハムを覚えておられた。それで、ロトが住んでいた町々を滅ぼされたとき、神はロトをその破壊の中からのがれさせた。

とあります。アブラハムは主の前に立ったからです。祈り続けたからです。

・ダニエルの用いられたもう一つの理由は、彼の「節制」でしょう。

ダニエル書10章12節によると、ダニエルは「主の前でへりくだらうと決めた」と書いてありますが、これはダニエルが己に打ち勝ったその戦いを表わしています。ダニエルは、自分の考え、自分の意思、自分の感情に負けずに、それを克服しました。ダニエル書10章3節にも、ダニエルがいかに節制したかが書かれています。ダニエルは少しも自分に益するところを考えず、すべてを主にささげていました。聖霊が私たちを支配してください、私たちがただ一つ、主のご目的を成そうとする熱意に燃えるようにしていただければ、本当に幸いです。前に開いた、

コリント人への手紙・第一 9章25節

また闘技をする者は、あらゆることについて自制します。彼らは朽ちる冠を受けるためにそうするのですが、私たちは朽ちない冠を受けるためにそうするのです。

と。「朽ちる冠」、金メダルのようなもの。「私たち」、私たち主に属する者、です。

・ダニエルが用いられた理由は、彼の「確信」でした。

ダニエル書 10 章 12 節に「あなたのことばは聞かれています」と書かれています。「既に聞かれた」とダニエルは確信しました。ダニエルは主のみこころを知っていましたし、祈りのとおりに主は成してくださることを信じて、待ち望んでいました。

祈りが主に聞き届けられるには、このように、主の心を知り、結果を期待し、確信することが必要です。主のみこころを知っていなければ、何をどのように祈っていいかわかりません。もし、私たちが主のことばにより、そのみこころを知るなら、それは私たちの力となることは間違いありません。主とともに働くことこそ、私たちに与えられている最も大切な使命です。

私たちは、ダニエルと同じように、主は何を成そうとしておられるのか知っているのでしょうか。もしそのことを知るなら、ダニエルを襲ったように、悪の霊の働きや攻撃も身近に感じるようになるでしょう。主のみこころを知った者は悪魔の攻撃の目標となります。

パウロも同じことを経験しました。悪魔はパウロを集中的に責めました。

コロサイ人への手紙 4 章 2 節、3 節

目をさまして、感謝をもって、たゆみなく祈りなさい。同時に、私たちのためにも、神がみことばのために門を開いてくださって、私たちがキリストの奥義を語れるように、祈ってください。この奥義のために、私は牢に入れられています。

パウロはまた次のように告白しました。

テサロニケ人への手紙・第一 2 章 18 節

それで私たちは、あなたがたのところに行こうとしました。このパウロは一度ならず二度までも心を決めたのです。しかし、サタンが私たちを妨げました。

主がダニエルやパウロにしてくださったように、私たちの心の目を開き、何をおいてもまず主とともに働く者になりたいという願いを持たせてくださるなら、本当に幸いです。

主が私たちに向かって、「大いに愛される人よ」と呼びかけられるようになったなら、本当に幸いではないでしょうか。

ダニエル書 5 章には、主の主権を内に持った者のみが、主とともに永遠の御国を治めることについて書かれています。

ダニエル書 5 章 12 節

「王がベルテシャツアルと名づけたダニエルのうちに、すぐれた霊と、知識と、夢を解き明かし、なぞを解き、難問を解く理解力のあることがわかりましたから、今、ダニエルを召してください。そうすれば、彼がその解き明かしをいたしましょう。」

ダニエルが持っていた霊は優れた霊だったと書いてあります。この 5 章は、主が主権を持っておられると述べています。その時のダニエルは、ベルテシャツアル王の目にとまって

いませんでした。ただ王妃の記憶にダニエルのことが残っていたに過ぎません。ダニエルは忘れられた存在でした。ベルシャツアル王の前にダニエルが立った時、王はダニエルに、「あなたはダニエルか」と聞いています。以前には、ダニエルは主の恵みにより国の三番目の司でした。けれど、今ダニエルは全く忘れられた存在となっています。けれど主は、そのご主権をもって、最善の時にダニエルを再び世に現わしてくださったのです。ベルシャツアル王が死ぬ前にダニエルを王の前に導き出されました。主は時々そのような導き方をなさいます。主のしもべがどこにいるのか分からないまでに、世から隠してしまわれるときがあります。

- ・ヨセフは、そうでした。エジプトに売られ、牢屋に入れられ、忘れられた存在でした。
- ・モーセも、そうでした。四十年の間荒野に住み、人の目につきませんでした。
- ・エリヤは、三年半山の中に置かれ、忘れられた存在でした。
- ・ヨハネは、伝道を始めるまで、荒野で生活をしました。
- ・パウロは、バルナバに導かれてアンテオケに来るまで、だれにも知られませんでした。

主とともに永遠の御国を支配しようとする者は、同じように導かれるでしょう。一度隠され、己に死に、主に生き、よみがえりの主にあずかる体験を持つ必要があります。

主に仕えるまことの主のしもべは、自分の計画を持ちません。しもべらは、荒野に置かれ、台所の隅に捨てられた瀬戸物のように、用いられずに何年も過ごさなくてはならないといった経験もすることでしょう。

もし召された人であって、自分がその務めをしなければ他にする者がいない、けれど、自分はできない、とそのような立場に置かれた人は、実に大きな苦しみの中にあると言わなければなりません。

ダニエルの場合がそうでした。そのような時には、何とかして自分でやろうとする誘惑が来るものです。このような時にも、肉の力によらず、ただ主のみこころにゆだねて、一歩々々歩むなら本当に幸いです。ダニエルの場合はそうでした。ダニエルは、自分が高い地位に上がるか上がらないかは、主のみこころにあるのであって、すべてをまかせていました。ダニエルに課せられていた責任は、ただ主を仰ぎ、主に従うことだけでした。ダニエルは、決して自らの力、立場を高めようとしなかったのです。しかし、ベルシャツアル王はダニエルに紫の衣を着せ、国の第三の司に任命しました。これは主が全能の神であられる証拠です。これは、主なる神はご自分の子たちを見捨てず、絶えずみこころに留め、み思いのままに導いてくださる証拠です。

ダニエル書 6 章には、勝利の祈りについて書いてあります。ダニエルは当時、七十歳、八十歳の歳でした。長い間祈り続けてきたダニエルの祈りは、身についた祈りでした。

ダニエル書 6 章 10 節

ダニエルは、その文書の署名がされたことを知って自分の家に帰った。——彼の屋上の部屋の窓はエルサレムに向かってあいていた。——彼は、いつものように、日に

三度、ひざまずき、彼の神の前に祈り、感謝していた。

悪魔は、ダニエルに部屋の窓を閉めさせようとしてきました。ダニエルに敵対する者を悪魔は用い、おきてを定め、まことの神に礼拝するダニエルの祈りをとどめようと試みました。その計画は失敗に終わりました。ダニエルは、いのちを保ち、ついにクロス王の時まで栄えたと聖書は記しています。

ダニエルは、なぜいろいろな試みに打ち勝ったのでしょうか。それは、彼がバビロンの国の影響力のある大臣だったからでしょうか。決してそうではありません。祈りによって天と結びつき、主なる神の権威を心の内に宿していたからです。

ダニエルは、幼いときに主を信じ、若いうちから主のみこころに反するものによってその身を汚すまいと心に思い定め、固く立って、年老いた今に至りました。このダニエルを主は豊かに守り導いてくださらないはずがありません。メディヤとペルシヤの法律の前に身をかがめず、年老いたにもかかわらず、ダニエルは固く主の前に立ち続けました。

ダニエルは、この世の国のメディヤ、ペルシヤの国のおきてのそのまた上にあるおきてを知っていました。主の御名によって祈る祈りは、この世のおきてさえも支配することをよく知っていたのです。ダニエルは、エルサレムに向かって窓を開かなかったことは一日もなく、いつも窓を開け放して祈った、と聖書は記しているのです。

世界帝国バビロンとメディヤ、ペルシヤは、滅んでいきました。獅子の口はダニエルを殺すことができず、ダニエルの敵は一人としてダニエルを傷つけることができませんでした。ダニエルは、祈りによって勝ち進んでいきました。身を低くし、ひざまずき、絶えず主に祈りをささげる者だけが、常に固く立つことができます。ダニエルは、主のみこころから一時も目を離したことの無い祈りの人でした。彼は、主の御名によって祈る祈りの力を信じていたのです。

ダニエルのような者が、今の時代にも必要なのではないのでしょうか。私たちはダニエルのように、本当の獅子がほえている穴の中に投げ込まれるといったことはないでしょう。けれど、悪魔はほえたける獅子のように食い尽くすべきものを探し求め、私たちの祈りを妨げようとしています。

私たちは、ダニエルと違って窓を閉めてしまっているのでしょうか。それとも、主の前に、心をいつも注ぎ出して祈っているのでしょうか。私たちが主とともに栄えある永遠の御国を支配するか否かは、この祈りにかかっています。

ダニエルの神は、今なお私たちとともに私たちの内におられます。主の恵みを賛美し、感謝すべきではないのでしょうか。

了